

胃癌腹膜播種診断における審査腹腔鏡の有用性に関する検討

研究対象：

2010年10月から2015年12月までに国立がん研究センター東病院において、高度進行胃癌に対する初回の審査腹腔鏡検査を施行した患者さんを対象とします。

研究の概要：

進行胃癌で最も頻度の高い転移形式は腹膜播種であり、これは腹腔内にがん細胞が散布された結果、腹水の貯留や腸閉塞などを引き起こす病態です。腹膜播種を認めた場合の生存期間は1年前後とされています。手術によって胃の病変を切除しても生存期間の延長に繋がらない事が報告されており、現時点では治療の主体は抗がん剤投与と考えられています。しかし、腹膜播種はCT等の画像診断では、かなり進行した場合でないと検出できない事も多く、検出率は25~50%程度と報告されています。胃癌に対する審査腹腔鏡は、画像診断で検出困難な腹膜播種や腹腔内の遊離腫瘍細胞を検出する目的で行われており、近年その有効性が報告されています。腹膜播種を正確に診断する事により、不必要な開腹手術（開腹して初めて腹膜播種が見つかる場合）を回避し、速やかに抗がん剤治療を導入する事が可能となります。しかし、全身麻酔を必要とする侵襲的な検査であることから、その適応については十分な検討が必要です。しかし、適応について未だ統一された指針は無いため、各施設で定めた基準に則って行われているのが現状です。

本研究ではこれまでに当科で施行した審査腹腔鏡の診断結果および診断精度について検討し、当科でのこれまでの適応が妥当であったかどうか考察します。

研究の意義：

腹膜播種を伴う胃癌の予後は不良であり、その治療成績を向上させる事は、現代の胃癌治療における重要な課題の一つです。正確な病期診断は治療の根幹であり、そのために審査腹腔鏡の果たす役割は大きいと推察されます。本研究は国立がん研究センター東病院というがん治療に特化した施設で治療された患者さんを対象にすることで、今までの研究よりも比較的大規模で質の高い解析を行うことが可能となります。本研究の結果を公表することが、国内外の専門病院および一般病院において進行胃癌の患者さんを治療する上で、審査腹腔鏡を行うべきかの判断に関して重要な助けとなることが期待されます。

目的：

本研究は、国立がん研究センター東病院で高度進行胃癌に対する審査腹腔鏡検査を受けた患者さんのうち、腹膜播種が認められた方の割合（腹膜播種の検出率）や、審査腹腔鏡では腹膜播種が見られなかったが、その後の開腹手術で腹膜播種が指摘された方の割

合（審査腹腔鏡検査における偽陰性率）について検討し、当科での高度進行胃がんに対する審査腹腔鏡検査の適応が妥当であるかを考察する事を目的としています。

方法：

2010年10月より2015年12月までに国立がん研究センター東病院において、審査腹腔鏡検査を受けられた方々の診療録より必要な情報（年齢、性別、審査腹腔鏡検査施行前の腫瘍進行度、審査腹腔鏡検査時の所見、周術期合併症、審査腹腔鏡後の治療など）を収集します。これらの診療情報を解析して、当院での審査腹腔鏡検査の有用性について検討します。

個人情報保護に関する配慮：

閲覧する診療録には個人情報が含まれますが、患者さん個人が特定されないやり方で情報を収集します。対象となる患者さんの識別は本研究専用で別途割り振られた研究番号を用いて管理し、個人情報が院外に出ることはありません。患者さま等からのご希望があれば、その方の診療録は研究に利用しないようにしますので、いつでも次の連絡先まで申し出てください。

照会先および研究での利用を拒否する場合の連絡先：

研究代表者(研究責任者)：木下 敬弘
国立がん研究センター東病院 胃外科
〒277-8577 千葉県柏市柏の葉6-5-1
TEL：04-7133-1111 内線：91250
FAX：04-7134-6865
E-mail：takkinos@east.ncc.go.jp

研究事務局：海藤 章郎
国立がん研究センター東病院 胃外科
〒277-8577 千葉県柏市柏の葉6-5-1
TEL：04-7133-1111 内線：91874
FAX：04-7134-6865
E-mail：akaito@east.ncc.go.jp